

流言の社会心理学

沼田 健哉

1. 流言とは何か

流言・デマ・うわさというような言葉で呼ばれている社会現象がある。それは、不確かで誤った情報が人から人へ伝達されていく過程と考えられることが多いが、本当にそう言えるのであろうか。その考察を試みる前に、まず流言の具体的事例を新聞の紙面から拾い上げてみたい。以下、見出しと主要な内容を記すことにする。

〔事例1〕 5000人デマに踊る／14億円取り付け騒ぎ／信金10店に夜も行列
愛知県小坂井町の豊川信用金庫小坂井支店で「取り付け騒ぎ」が起きた。「経営が左前らしい」などという全くデマの怪電話をきっかけに、朝から預金の引き出し、解約を求める人が殺到し約千人に達した。午後になって、本店・他支店にも引き出しを求める人達がおしかけた。預金者の不安を少しでもためらわずに深夜まで支払いを続行し、本店支店合わせて延べ4890人に約14億円を支払って騒ぎはおさまった¹⁾。

〔事例2〕 余震情報で避難騒ぎ／「間もなく大地震……」／うわさ飛び住民が混乱

伊豆大島近海地震の影響が残っている静岡県で県災害対策本部が出した「余震情報」がもとになって、「数時間以内に大きな地震が起こる」といったうわさが飛び交い、所によっては住民がパニック状態になって避難を始め

1) 朝日新聞, 1973. 12. 15.

た。驚いた県当局は、あわててうわさの打ち消しを図ったが、騒ぎは夜まで続いた²⁾。

〔事例3〕 「プールで性病」のデマ／利用者激減の被害

長野県佐久市にある県営プールで、「ネオン街で働く東南アジアの女性達が泳ぎに来ているから、プールに行くとき性病にかかる」というデマが流れ、利用者が急減した。デマは、「プールで性病をうつされた子どもがいる」「小学校では『あのプールに行くな』と指導している」といったものである。プールの管理事務所や保健所へ問い合わせの電話が連日かかってきた。そのため、水質検査を毎日6回ずつ実施したが基準に達していた³⁾。

〔事例4〕 金日成死亡説両極の情報／北朝鮮の大使が否定／党通じ殺害連絡

朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席が死亡したという説は、依然真相が不明である。韓国の国防相は、国会で「金主席が死亡したか、北朝鮮内部で激しい権力闘争が展開されている可能性が強い」と述べている。また、ハノイ発共同通信電は、「ベトナム共産党当局が、金主席が殺害されたとの連絡を北朝鮮の労働党から受けた」と伝えている。この他に、東側西側とも死亡説を裏付ける情報はない⁴⁾。

〔事例5〕 「インドが攻めてきた」「秘密警察による犯行」／事故直後うわさ乱れ飛ぶ

大惨事を引き起こしたパキスタン陸軍武器貯蔵施設の爆発事故直後、様々なうわさが乱れ飛んだ。第1のうわさは、「インドが攻めてきた」というものである。これは、ガンジー政権が苦境にあり、注意を外に向けるためと説明された。似たものとしては、原爆を製造していると言われているウラン濃縮工場が爆撃されたといううわさもあった。第2のうわさは、アフガニスタン（ナジブラ政権）の秘密警察組織による犯行だとするものである。成立寸

2) 朝日新聞, 1978. 1. 19.

3) 朝日新聞, 1984. 9. 12. 夕刊.

4) 朝日新聞, 1986. 11. 18.

前のジュネーブ合意への最後の抵抗だという。ナジブラ政権が和平を前に米国製兵器のアフガニスタン流入阻止を図ったといううわさもあった。第3のうわさは、パキスタンがソ連と対等に渡り合おうとしたことに対するソ連のいやがらせだとするものである⁵⁾。

〔事例6〕 ブタの脂パニック／禁じられているのに日常食品に混入？ 調査がうわさの種

日常食品の中に、イスラム教徒が摂取を禁じている豚の脂肪を使ったものが多数あるとのうわさが出回り、ちょっとしたパニックが起きた。イスラム教徒から徹底究明の声が上がり、政府の否定声明も焼け石に水であった⁶⁾。

ついで、このような流言は、いかに定義されているのであろうか。以下、代表的なものをあげてみよう。

「デマは、特殊な（あるいは時事的な）信念の叙述であり、人から人へ伝えられるもの、ふつうは口伝えによるもの、信じ得る確かな証拠がしめされていないものである。」⁷⁾（オールポート、ポストマン）

「流言は、情報の拡散する過程であると同時にその過程の産物でもある。……それは確認されない情報を中心に構成されたコミュニケーションである。」⁸⁾（ロスノウ、ファイン）

「流言とは、公的に検証されることなく流布された、時事的話題に言及するある信念についての叙述である。」⁹⁾（ナップ）

「流言とは、ある話題（説話）が人から人に順次伝達されてゆく非制度的かつ連続的なコミュニケーションの過程である。」¹⁰⁾（池内）

5) 朝日新聞, 1988. 4. 12.

6) 朝日新聞, 1988. 10. 31. 夕刊.

7) G. A. Allport, L. Postman, *The Psychology of Rumor*, 1947 南博訳『デマの心理学』岩波書店1952 pv.

8) R. L. Rosnow, G. A. Fine, *Rumor and Gossip*, 1976 南博訳『うわさの心理学』岩波書店. 1982. p 18.

9) R. H. Knapp, *A Psychology of rumor*, *Public Opinion Quarterly* 8 1944 p. 23.

10) 池内一「流言」八木晃編『心理学Ⅱ』培風館1968. p. 310.

「流言は、その内容の真偽を問わず、確実な知識に土台を置いた情報ではない。……それは、ある社会的な拡がりを持った、連鎖的コミュニケーションである。」¹¹⁾ (木下)

「流言蜚語は、アブノーマルな報道形態として規定することができる。」¹²⁾
(清水)

「流言とは、あいまいな状況とともに巻き込まれた人々が、自分たちの知識を寄せ集めることによって、その状況についての有意味な解釈を行なおうとするコミュニケーションである。」¹³⁾ (シブタニ)

「われわれは、公式のニュース・ソースによって公然とはまだ裏書きされなかったり、あるいはそれによって否定された情報の社会体内での出現をうわさと名づけよう。」¹⁴⁾ (カプフェレ)

「流言は、集合体内のコミュニケーションである。現実についての定義が議論のやりとりの中で構成され、確認されていく。」¹⁵⁾ (ターナー、キリアン)

以上が、流言についての心理学者と社会学者の代表的な定義である。両者の差異は、心理学者がある話題の連鎖的伝達を強調するのに対して、社会学者はある状況についての集合的解釈ないしニュースとして流言を定義しているところにある。

なお、流言とデマについては、自然発生的な流言に対して、誰かがある人物や組織などにダメージを与えようとして流すものがデマであるとして、両者を区別すべきだという主張がよくなされる。しかし、ある話を他人から伝

11) 木下富雄「流言」池内一編『講座社会心理学3 集合現象』東京大学出版会1977. p. 12.

12) 清水幾太郎『流言蜚語』岩波書店1947. p. 7.

13) T. Shibutani, *Improvised News*, 1966, 広井脩・橋元良明・後藤将之訳『流言と社会』東京創元社. 1985. p. 34.

14) J. N. Kapferer, *Rumeurs* 1987. 吉田幸男訳『うわさ』法政大学出版局. 1988. p. 22.

15) R. H. Turner, L. M. Killian, *Collective Behavior* (3rd. ed.) Prentice-Hall 1987. p. 73. 75.

えられた人にとって両者を区別することは困難であり、この言葉は互換的に用いられていることが多く、本稿では流言の方を用いる。

また、流言とうわさに関しても、その拡がりの範囲によって両者を区別する例もみられるが、うわさを小型の流言とする説と、流言をうわさの一種とする説とがあり、混乱がみられる。さらに、話題によって、ゴシップ、スキャンダルなどを流言と別扱いする例もあるが、本稿では、デマ・うわさ・ゴシップ・スキャンダル・中傷・陰口・風聞・風評・風説・虚言などの人から人へのコミュニケーションを総称する用語として流言を用いることにしたい。

以下、本稿では、流言に関する従来の研究成果の検討を通して、現代社会における流言の特徴と機能について考察を試みることにする。

2. 流言の発生

流言が発生するためには、いくつかの内的、外的条件が必要である¹⁶⁾。内的条件とは、流言を生み出したり、受け入れたりする個人の動機や欲求をいう。外的条件とは、流言の流布しやすい社会的状況である。以下、個人的条件と社会的条件について言及する。

(1) 個人的条件

流言研究に大きく貢献したオールポートとポストマンは、流言の強度は状況の曖昧さと話題が個人に対してもつ重要さの積に比例するとして、 $R \sim i \times a$ の公式を提出した¹⁷⁾。状況の曖昧さとは、個人が自分の置かれている状況を十分に把握できず、不安な状況に置かれていることで、その結果不安から逃れるために状況に関する説明を求めて流言に飛び付くことになる。また、人々が集合的に行動してその結果、状況の定義づけを行なうことになるケー

16) 以下2章、3章、4章に関しては、以下の著書を参照している。木下富雄「前掲論文」木下「流言」戸川行男他編『講座現代社会心理学、4、大衆現象の心理』中山書店、1959。中村陽吉「流言の心理」『言語生活』No. 247。筑摩書房1972、17) 南博訳『デマの心理学』p. 42。

スもある。前出の事例5は、その一例としてあげられる。

話題の重要さとは、話題と個人のかかわり合いの程度といえるが、流言が発生するためには、ある主題が人々の興味を引き、関心をそそるものでなければならない。事例1は金銭、2は地震、3は病気、4は要人の死、5は大事故、6は食品といずれも人々の関心事である。生命・財産・名誉が人間の3大関心事だといわれているが、とにかく人々の関心を引く主題であれば何でも流言の対象となりうるのである。

オルレアンで発生した女性誘拐のうわさについての調査では、そのうわさは少女や若い女性の間生まれ、大人の女性の間へ拡まっていったが、男性は女性のおしゃべり話として割引いて聞いたという¹⁸⁾。

以上の他に、個人の欲求・感情などがあげられている。流言は、人々の心の中に高まっている心理的緊張を、他人への言語コミュニケーションによって解消しようとする心理的適応の試みである。スケープゴートに選ばれた者の上に潜在的な感情を投射してその感情を和らげたり、他人の知らない情報を伝えてやることで自尊心を満足させたりする。オールポートは、流言の動機を、憎悪・不満・不安・恐怖・願望・好奇心などのタイプに分けた¹⁹⁾。また、関東大震災の時の朝鮮人襲撃の流言やオルレアンのうわさがユダヤ人の店を名指していること、事例3は東南アジアの女性についての流言であることなどは、人種的偏見の投射と考えられる。さらに、戦場という苛酷な状況下で、妄想の世界に半ば意識的に遊ぶことによって苦痛から逃れようとしてデマが生まれたとの報告もある²⁰⁾。そして、フェスティンガーは、広範な画一的な認知的不協和が存在する時、不協和低減の試みの一つとして流言が発生すると主張する²¹⁾。

18) Edgar Morin, *La Rumeur d'Orleans*, Éd. du Seuil, 1969. 杉山光信訳『オルレアンのうわさ』みすず書房1973. p. 28-29.

19) オールポート, ポストマン『前掲書』p 7-14.

20) 山本七平『私の中の日本軍(上)』文春文庫1983. p 85.

21) L. Festinger, *A Theory of Cognitive Dissonance*. 1957. 末永俊郎監訳『認知的不協和の理論』誠信書房1965. p 187.

(2) 社会的条件

個人の内部から流言が生まれるとしても、それが社会現象となるためには社会状況に一定の条件が必要である。

まずあげられるのが、流言集団の存在である。「デマはそれぞれの公衆をもつ」²²⁾とか「うわさの市場」²³⁾とかいわれるが、ある主題に関して共通の心理的つながりをもつ人々の存在があげられる。事例1では、豊川信用金庫と取り引き関係にある人、事例2では、余震の被害の予想される地域に住んでいる人々、事例3では、プールの利用者、事例4では、朝鮮民主主義人民共和国・韓国両国民のみならず朝鮮半島に直接的もしくは間接的に利害関係をもつ人々、事例5では、爆発事故の影響を受けた人々、事例6では、イスラム教徒達、これらが流言集団と考えられる。流言集団の大きさによって、流言の流布する範囲が決まってくる。事例1・3では数千人程度であろうが、事例4・6では数千万から数億人に及ぶかも知れない。

つぎに、社会的緊張、危機があげられる。社会的危機は、人々の生命財産を脅かし、心理的不安や恐怖心を高め、好都合な解決が生ずることへの願望をも強くさせる。そこで、不安や恐怖を克服したり、願望を満たしてくれたりするような情報が流言として拡まっていく。戦争・革命・経済恐慌のような社会的危機、災害のような天変地異に際しては、多数の流言が発生することが知られている。太平洋戦争中の戦時デマ、関東大震災時の朝鮮人襲撃デマはこの例である。また、前者は日本の戦局が悪化するとともに増えていった²⁴⁾。事例1は、オイルショック、物不足パニックの起きた1973年に発生している。事例2は、地震から4日目に発生しており、事例4は、朝鮮半島の緊張状態に起因している。さらに、選挙のように意見の対立が明瞭になる状況では、デマが飛び交うことも珍しくない。

22) オールポート, ポストマン『前掲書』p 209.

23) カプフェレ『前掲書』p 113.

24) 池内一「太平洋戦争中の戦時流言」『社会学評論』第2巻第2号1951. p 41.

ついで、情報の不足も流言発生のための社会的条件としてあげられる。情報の不足は、社会的危機の状況で発生することが多い。なお、情報の不足は、災害のような物理的制約による場合と言論統制のような社会的制約に基づく場合とがある。

関東大震災の時、東京の新聞社はほぼ壊滅状態となり、ラジオ・テレビのなかった時代なので情報不足の状態となった。また、戦争中には、言論統制・報道管制により国民の知りたい情報は十分与えられず、流言が流布した。さらに、ソ連のような社会主義国ではマスメディアは国家機関の一部であり、当局に都合の悪い情報は国民に伝達されない。そのため、人々は、外国のラジオ放送とともにうわさという非公式メディアに広範に依存している²⁵⁾。清水は、流言をアブノーマルな報道といったが報道に対する飢餓を満たすものとして流言が発生するというのである²⁶⁾。

3. 流言の伝達

本章では、流言がどのような人達の間でどのくらいのスピードで広がるかについて検討する。

流言は、ある主題に関して関心を共有する人々（流言集団）の間を流れていく。個人がある流言を聞いた時、その流言に対して興味や関心を示す人に伝えることが考えられるが、伝達のもう一つの条件は、お互いに何らかの形でコミュニケーションができることである。フェスティングラーらの調査結果は、関心の共通な人々の間で流言が広がったことを示している。ある団地内での託児所設立に関する流言は、地域活動への参加者と保育所適齢期の子どもをもつ親たちの間でよく聞かれていた²⁷⁾。

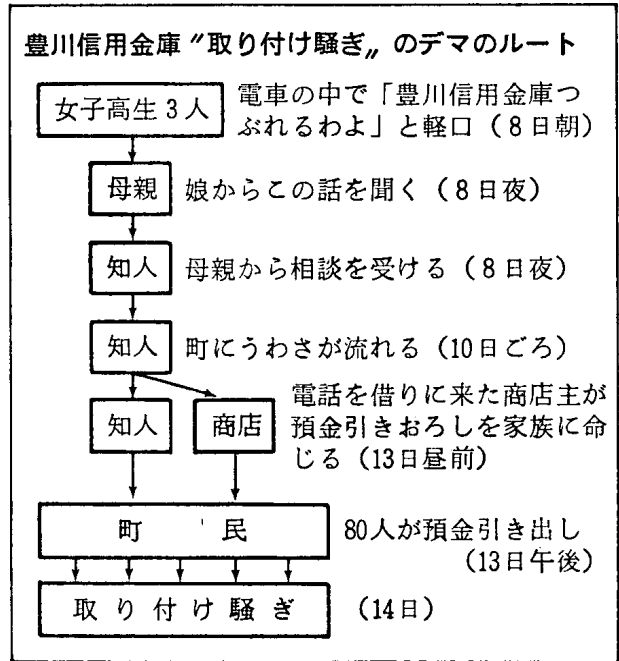
25) R. A. Bauer, D. B. Gleicher, Word-of-mouth communication in the Soviet Union, *Public Opinion Quarterly* 17 p. 302-307.

26) 清水『前掲書』p. 17.

27) L. Festinger et. al, A Study of a rumor: its origin and spread, *Human Relations* 1 1948. p. 480.

また、流言は、相互に親しい人々の間で授受されていることをもフェスティンガーらの調査は示している。前記の流言を聞いた者の比率は、親しい友人のある人62%、単なる知人のある人42%、友人のない人33%であった²⁸⁾。

事例1の豊川信用金庫の流言については、警察が誰かが意図的にデマを流したのではないかとの疑いで捜査を行ない、伝達ルートをはっきりとした。それによれば²⁹⁾、女子高生の軽口に始まった流言は、家族・知人といたったルートで流れている。従来から言われているように、誰からともなく流言を聞くことはむしろ例外ではないかと思われる。太平洋戦争中の戦時流言、新潟



朝日新聞, 1973. 12. 17より

地震の際の流言、豊川信用金庫の流言について誰から伝えられたかをみると、戦時流言では、旅行中、交通機関の中で会った人、未知の人、風評などが6割を占めていたが、新潟地震の際の流言では未知の人から流言が伝えられた率は3割強であり、豊川信用金庫の流言では未知の人から伝えられた率は5%弱にすぎない³⁰⁾。

また、集団内のソシオメトリックな人間関係が流言の通路となり易いという実験結果もある。流言の流れる方向と集団内の地位の分化との関連については、一般的に地位の低い者から高い者の方へと流れる傾向がみられる。こ

28) Ibid. p. 479.

29) 朝日新聞1973年12月17日

30) 木下富雄「流言」『講座社会心理学 3 集合現象』p. 37-38.

れは、地位の低い者が自分の得た新しい情報を上位の者に知らせることでその関心を引き、自分を認めさせ、地位を引きあげてもらおうとすることによると説明されている。

前述のコミュニケーションし易さという点から、流言の伝え手と聞き手との間の物理的距離が近くなるほど情報伝達量は加速度的に増えるという実験結果もある³¹⁾。

流言の拡がるスピードについてはよく分かっていないが、一般に考えられているよりは速く伝わる。関東大震災の際の朝鮮人襲撃デマは、9月1日夜7時頃、横浜市本牧町附近での「朝鮮人放火す」という声に始まったが、翌日の正午頃までには横浜市内に拡がり、鶴見、川崎方面にまで達した。その日のうちに東京市内から関東一円の各県に及び、3日には福島県にまで達している。交通機関・電信・電話が壊滅している状況下では、驚異的な速さであった³²⁾。マス・メディアの発達している現代社会においては、情報伝達のスピードアップは著しい。流言ではないが、ケネディ大統領暗殺のニュースは最初の報道から60分以内に調査対象者の90%が知っていた。彼らのうちの約半数は15分以内に、70%は30分以内にこの事件を知っていた³³⁾。事例2の余震情報騒ぎにおいては、テレビ・ラジオのニュースが一役買っている。また、豊川信用金庫の流言では、電話とアマチュア無線により流言が拡がっている。流言は、人から人へ口頭で直接伝達されるばかりでなく、現代の機械メディアによって急速に伝えられるのである。

4. 流言の変容

流言は、伝達の過程で内容が変化していく。この現象は、連鎖的コミュニ

31) S. C. Dodd, Testing message diffusion in controlled experiments, A. S. R. 18 1953 p. 411-412.

32) 吉村昭『関東大震災』文春文庫1977 p. 132-139.

33) B. S. Greenberg, Diffusion of news of the Kennedy assassination P. O. Q. 28 1964 p. 226-227.

ケーションの形で流言が拡がっていくことの必然的な結果であり、伝達者が故意に嘘をついた結果ではない。オールポートとポストマンは、絵を見せて連鎖的に再生させる実験を行ない、再生内容の変容について、平均化・強調・同化といったメカニズムを確認した。平均化というのは、流言が伝達の途中で次第に短くなり、要約され、平易な内容のものに変っていく傾向である。平均化は、伝達の最初の段階で目立つが、一定の限度まで進むとそれ以上は進行しない。強調とは、流言が伝えられていく間にある特定の部分・項目が選択されて記憶され強調されて伝えられることであり、平均化とは裏腹の現象である。それは、しばしば誇張の形をとって現われてくる。

同化とは、個体のもつ認知的枠組によって項目の取捨選択・置換・移入が行なわれ、全体の内容が再構成される傾向である。比較的非情緒的な同化として、中心テーマへの同化、よい連続・圧縮による同化、予期への同化、言葉の習慣への同化を彼らはあげている。また、より深く動機づけられた同化としては、女性の衣服の関心への同化、職業的関心への同化、自己関心への同化、偏見への同化があげられている³⁴⁾。

だが、彼らの3つのメカニズムが現実社会の中で流布している流言にあてはまるかどうかについては、疑問が提出されている。連鎖的再生実験における変容と現実社会の流言のそれとは以下のような相違があると思われる。まず、現実社会の流言は簡明なものが多く、実験で用いられるような長くて複雑な題材は稀である。さらに、人々の動機づけが異なっている。現実社会の流言は、人々の興味を引く題材であるが、実験の題材はそうではない。そして、現実社会の流言では、伝達行為への人々の関与度が異なる。また、実験室では流言の伝達は1人から1人へと一方通行的に連鎖的に行なわれるが、現実社会では網の目状のコミュニケーション・ネットワークが存在し、流言が繰り返し伝えられることも少なくなく、流言の誤りや矛盾を訂正する機会

34) オールポート、ポストマン『前掲書』第5、6章。

もある。また、オールポートらの平均化仮説については、ピーターソンとギストが実際に生じた流言を分析して、人々が強い関心を示している流言は伝達途上でより詳細になっていくこと（雪だるま効果）を見出した³⁵⁾。

豊川信用金庫の流言では、「信用金庫は危ないわよ」といった軽口が、「豊川信用金庫が危ないわという話を聞いたが……」と変わり、やがて「豊川信用金庫がつぶれるかもしれない」となった。そして、ついに「豊川信用金庫がつぶれる」と変っていった³⁶⁾。ここにみられるのは、平均化よりも強調であり、信用金庫が豊川信用金庫に変わったのは同化とも考えられる。また、事例2の余震情報騒ぎでは、地震の規模を表わす「マグニチュード6」が揺れの程度を示す「震度6」に変わったり、「午後6時」に変わったりしているが、これは同化であろう。さらに、「2～4時間後」「3時間後」「間もなく」などの情報が付け加えられて切迫感が増している。これらも、強調および不安感への同化とも考えられる³⁷⁾。なお、2つの事例とも流言の内容が短かったせいも平均化は生じなかった。

5. 流言のライフサイクル

当章では、ある流言の発生から消滅までの一生を検討してみることにしたい。「人のうわさも75日」といわれるが、流言の平均寿命はどのくらいなのだろうか。この点に関する統計的研究はないので、個々の流言の事例研究から推測するほかはない。比較的長く続いたと思われるのが、オルレアンでの女性誘拐のうわさであるが、それでも2ヵ月足らずの生命であった³⁸⁾。また、前述の関東大震災の朝鮮人襲撃デマは、9月16日に出た内務省の新聞・雑誌の検閲命令にもかかわらず、地方紙には流言に関する記事が報道されていた

35) W. A. Peterson. N. P. Gist, Rumor and public opinion, A J S 1951 p. 162-166.

36) 藤竹暁『パニック——流言蜚語と社会不安』日経新書1974 p. 9-11.

37) 広井脩『災害と日本人』時事通信社1986 p. 188.

38) モラン『前掲書』p. 45.

とのことなので³⁹⁾、半月以上生きていたといえる。なお、豊川信用金庫の流言は、12月8日から17日までの10日間の生命であったし⁴⁰⁾、余震情報騒ぎでは半日以内であった。これらの例からも分かるように、流言の生命は比較的短く、75日も続いた例は聞かない。これは、人々がしだいにある流言に対する関心を失ってしまったり、ある流言が拡がり、影響が出始めると利害関係者・マスコミ・行政当局などによって対抗措置がとられるからである。前日のオールポートらの公式によれば、流言は人々にとっての主題の重要さか、曖昧さかがなくなった時に姿を消す。重要さを霧にすることは難しいので、曖昧さをなくすために必要な情報を公表することなどが試みられる。75日というのは、人々がある主題について関心を持ち続ける最長期間とも考えられる。ただ、一部の特殊な流言は、神話ないし伝説に姿を変えて後々まで語り継がれることになる。

ついで、流言の誕生から消滅までのライフサイクルであるが、ロスノウとファインは、発生・発達・死の三段階に区別しているが常識をこえていない⁴¹⁾。これに対し、モランはオルレアンの女性誘拐のうわさについて以下のように述べている。「病菌の温床の上でどんどん増殖を続け、うわさは卵からかえる。そして、急速に拡大し激しさを増す。驚くべき転移を生じたけりくるい、反撃にあって自ら解体する。そして、様々な妄想やミニうわさに後退し、すっかり忘れ去られ、残留物と病菌のみを残していく。」⁴²⁾モランは、ふ化・感染・反撃・収束・残留物・病菌と、流言の生活史を流行病の拡大にたとえたが、伊藤らは、豊川信用金庫の流言について、デマの発生・成長・成熟・対抗措置・鎮静・消滅といったプロセスで説明している⁴³⁾。

それでは、オルレアンのうわさの経過を眺めてみよう。モランの調査報告

39) 吉村『前掲書』p. 190.

40) 伊藤陽一、小川浩一、榊博文「デマの研究——愛知県豊川信用金庫“取り付け”騒ぎの現地調査Ⅰ」『総合ジャーナリズム研究』No. 69. 1974. p. 74-79.

41) ロスノウ、ファイン『前掲書』p. 39.

42) モラン『前掲書』p. 45.

43) 伊藤ほか「前掲論文」

を参考にすると、最初にうわさは少女たちの教室のなかで開花した⁴⁴⁾。うわさが名指したのは、「ドルフェ」の店1軒だけだった。「ドルフェ」の店で2人の女性が見えなくなったというものだった。わなにかかった女性は、試着室で注射を打たれ、地下室へ運ばれていったというのである。「ドルフェ」の地下室で、警察が麻酔をかけられている2人の女性を発見し、彼女達は運ばれた病院で正気を取りもどしたところだという。うわさは現実性をもち、信頼すべき情報源に由来し、信頼をももたされた。

ついで、増殖段階となり、うわさは大人達の世界へと拡まり、おしゃべりの場はどこでもこのうわさの話でもちきりである。そして、うわさにも尾ひれが付けられ、さらわれた女性は60人で、「ドルフェ」1軒で28人が見えなくなったとまでいわれる。女性誘拐は、合わせて6軒のグループがやっていて、靴の店は靴底に仕込まれた針が麻酔をかけるのだという。店の主人はすべて若く、モダンな感覚ではやっている。そのうち5人はユダヤ人である。大人の女性たちは、うわさへの反撃を始め、名指されている危険な店に立入らぬよう注意したり、見張ったりしてうわさの拡まりを助長する。

ついで、第3段階は転移である。うわさを抑える対策がとられなかったため、それは激しく増殖する。冗舌から、非難=告発に変化する。これらの店は、どの店とも地下通路によって結ばれている。店の主人たちは、ロワール川を船で、時には潜水艦で上ってくる専門の誘拐者とぐるになっていて、彼らに「積荷」を渡すという。行方不明の女性の数もどんどん増えていくが、警察が誘拐者を逮捕しないのはなぜか。新聞も何も書かないのはなぜか。それは、新しいうわさによると、警察も、市長も、新聞も、すべてユダヤ人達に買収されている。オルレアンの町では、人が集まる場所はどこもこの話でもちきりである。3つの店の周囲には人だかりができるが、客足はぼったり途絶える。そして、敵意をふくんだまなざしと、「ユダヤ人の店なんかに買いに行くな」の声がする。

44) モラン『前掲書』第1章。

ついで、第4段階ではうわさに対する反撃が始まる。地方紙が反撃の口火を切り、パリの中央紙もこれに加わる。抗議と否定のコミニケが続々と発表され、公権力・諸政党・人種差別に反対する組織等が介入する。この時から、うわさは衰えていき、消滅に向かう。だが、もとのうわさの解体から生じた小うわさ（小間物屋の娘2人がさらわれたとか、本当の犯人は別の所にいるのだとかの）が沢山みられ、様々な所でうごめくという状況もたらされた。

ついで、豊川信用金庫の流言の経過を辿ってみることにする⁴⁵⁾。流言は、12月8日の3人の女子高生の通学途中のおしゃべりから発生した。そのうち1人が豊川信用金庫に就職が内定していたのであるが、その当人に向かって、別の1人が「信用金庫なんて危ないわよ。」と言った。言われた女高生は、寄宿先の豊川市のお婆の家に帰ってから、友達に言われたことをお婆に話した⁴⁶⁾。お婆は、実兄の妻に「豊川信用金庫が危ないといううわさがあるが、本当かどうか調べてほしい。」と問い合わせた。これに対し義姉は、「そんなこと聞いたことないからデマでしょう」と言って安心させた。この義姉は、翌日美容院に行きそのマダムにうわさを伝えた。そして、さらに翌日、マダムは親類の女性にそのうわさを伝えた。この家に、小坂井町のクリーニング店主甲が遊びに来ていた。

流言は、甲とその妻の行動によって成長した。甲は、家に帰って妻にその話をしたが、2人ともその内容については半信半疑だった。ところが、13日に事態は急転する。午前11時半頃、知り合いの男が電話を借りに来た。彼は、家の者に豊川信用金庫に行ってすぐに120万円おろすようにと言っていた。彼は、商売上それだけの金が必要だったのだ。だが、何気なく聞いていた甲の妻は3日前のうわさを思い出した。やっぱりうわさは本当だったと思った彼女は、外出中の夫を呼び戻すと、すぐに小坂井支店に走らせ、預金180万

45) 伊藤ほか「前掲論文」、藤竹『前掲書』

46) 朝日新聞の記事では母親となっている。

円をおろした。そして、2人で手分けして友人・知人・得意先20数軒に電話した。これが、新聞紙上で「怪電話」とされているものである。彼らはさらに近所へ知らせに走った。この中にたまたまアマチュア無線家がいる、彼はハム仲間20数人に無線で伝えた。

そして、13日午後には流言は成熟し、取り付け騒ぎを引き起こした。その日、豊川信用金庫小坂井支店では、普通預金の全額払い戻しと定期預金の解約を求める人がいつになく多かった。職員がその理由を尋ねても、「とにかくおろさせてほしい」の一点張りだった。「豊川信用金庫が危ない」といううわさが町に流れていることを豊川信用金庫が知ったころには、預金引きおろしのためにタクシーでかけつける人も出てきた。タクシー運転手の話では、「豊川信用金庫が危ないらしい」から、「危ない」そして「つぶれる」とうわさは変わり、夜乗せた客は「あすはシャッターはあがるまい」と言ったという。この日には、59人が約5千万円を引き出した。そして、翌朝、支店には開店前から20人ほどの預金者の列が出来ていた。信用金庫も対策をたてており、経営上のことに不審な点のある者には説明するという貼り紙を出した。しかし、その結果は「倒産整理について説明会をやっていると聞いたが」という電話がかかってきた。さらに、短時間のうちにできるだけ多くの客に払い戻ししようとして万単位にすると「一万以下は切り捨てになるそうだ」とうわさされた。そして、利子計算に時間がかかるのでとりあえず元金だけ返すと、「利子が払えないのはやっぱり経営がおかしいからだ」と騒がれた。雑踏整理の警察が登場すると、「銀行の立入り捜査が行なわれている」と言われた。閉店時間も迫ったため整理券を渡したところ「こんなもんもらって何になる」とどなりつけられた。結局、この日は夜10時過ぎまで払い戻しの請求に応じ、1650件、約4億9千万円（通常払い戻し分を除く）を払い戻した。14日には、「使い込みをした者がいるらしい」「職員の中に5億円を持ち逃げした者がいる」「松井理事長が自殺した」などの流言も流れた。また、あのデマを飛ばしたのは朝鮮人だ、部落の人だというような派生デマもあった。

ついで、流言への対抗措置がとられ、豊川信用金庫は14日に2枚目の貼り紙を出した。その内容は、大蔵省、日銀が健全経営を保証するというものだった。15日には、全国信用金庫連合会・全国信用金庫協会連名のビラも貼られ、常務理事による説得活動も行なわれた。これに新聞も加わり、14日の夕刊各紙はデマ騒ぎを報じ、15日朝刊はデマから取り付け騒ぎと大々的に書きたてた。その内容は、預金引き出しに奔走する人々をやゆするようなものであった。それでも、新聞で初めて取り付け騒ぎを知り、預金をおろしに来た人もいた。警察は、意図的にデマを流した犯罪行為ではないかと捜査を開始し、クリーニング店甲夫妻から聞いたというルートを見出したが、誰も悪意はなかったとして捜査を打ち切った。

こうして、流言は鎮静に向かい、土曜日には信金は正午で営業を終えた。だが、異常とみられる引き出しはこの日も見うけられた。16日夕に警察が発表した流言のルートを、NHKは同日夜の東海3県向けおよび全国向けニュースで報じた。さらに、17日の各紙朝刊は警察発表を報道した。

結局、13日から17日までに異常に引き出された預金は6600口座、約20億円であった。しかし、この預金も再び戻ってきた。このようにして、流言は鎮静した。だが、22日になっても「豊川はつぶれたのではないか」という人とか警察発表も認めない人もいた。以上のように、流言はすぐには完全に消滅せず、「たった3人のうわさ話で町中があんなになるはずがない。裏には組織的な陰謀がある。警察も日銀も大蔵省もデマを早くおさえたくてきれいごとで済ませることにしたのだ。だからあの警察発表は政治的なものだ。」と語り者もいた。

6. 流言の性質と対策

流言は、ある話題についての公的に確認されていない情報が、人から人へと伝達されていくコミュニケーションである。

流言について、心理学者は個人の欲求と流言の連続的伝達を強調し、社会

学者は集合行動と相互作用の複雑なネットワークを重視する⁴⁷⁾。両者とも、曖昧な状況で流言が発生することは認めるが、心理学者は流言を人間の欲求や感情の表現だと考えるのに対して、社会学者はそれを社会的相互作用の産物と考える。だが、流言について研究する際は、心理的な側面と社会的な側面とを総合的に見る必要がある⁴⁸⁾。

さらに、流言と一言で呼ばれているが、流言にはいくつかのタイプがある。オールポートらは、流言の伝達動機によって分類したが、ビソフによる、這うような流言、急性の流言、潜水的な流言といった時間による分類もある⁴⁹⁾。シブタニは、流言形成のパターンから熟考的な流言と即断的な流言とを区別している⁵⁰⁾。また、状況解明型流言と状況創出型流言という分類も提出されている⁵¹⁾。曖昧な状況を解釈する試みとしての流言がこれまで主に論じられてきたが、オルレアンのうわさや豊川信用金庫の流言のように、かえって曖昧な状況を創り出してしまふ流言もある。従来流言の研究を顧みると、あらゆる流言を説明できるような理論はまだ出来ていないといえよう。流言というのは、「世界でもっとも古いメディア」⁵²⁾であり、複雑な社会現象なのである。

つぎに、従来から流言は間違っただけの情報と考えられている。だが、常に間違っただけの情報であれば、人々はどのようにして流言に飛び付くのだろうか。人々が流言を受け入れるのは、それに足りる何らかの根拠があると考えられる。多くの場合、人々が知りたがっているのに公的な回答がない時に流言は生まれる。そして、人々がある情報が真実であると信じ、まわりの人に伝えるだけの意

47) ロスノウ、ファイン『前掲書』p. 85.

48) 広井脩『前掲書』p. 174, 178.

49) オールポート、ポストマン『前掲書』p. 197-199.

50) シブタニ『前掲書』

51) 橋元良明「災害と流言」東京大学新聞研究所編『災害と情報』東京大学出版会 1986. p. 240-242.

カプフェレ、『前掲書』p. 15.

52) カプフェレ『前掲書』のタイトルの副題.

義があると評価する時に流言は拡がる。その上、ある流言が拡まれば拡まるほど人々はそれを受け入れる。これほど多くの人々が欺かれるわけがないと考えるからだ。また、ある流言に同意することはその集団の声・見解への忠誠心を表明することでもある。疑う者は異分子とされるのである。流言に賛同し参加することから得られる心理的利益が、流言が本当であるかどうかに関わらず人々がこだわらない理由である。そして、流言は何よりも娯楽、会話の継続、倦怠と空虚さの消去という機能をもっているとカプフェレは説明している⁵³⁾。

ついで、流言の統制について言及すると、社会的危機の時期に流言が盛んに発生して人々に悪影響を与えた例がよくみうけられる。戦時中は、流言の取締りも当局者にとって重大な課題であった⁵⁴⁾。ナップは、「ボストン流言クリニック」の経験に基づいて以下のような悪質な流言への対策を提案している⁵⁵⁾。①通常のコミュニケーション・メディアを信頼させるようにすること。②指導者を信頼させること。③信頼できる情報をできるだけ多く早く伝えること。④信頼できる情報を手に入れられるようにすること。⑤退屈、単調さ、個人的な動揺を防ぐこと。⑥流言の有害さ、好ましくない影響などについて慎重なキャンペーンを行なうこと。

たしかに、ナップの言うように、情報源に対する信頼を高めることが流言を防ぐことにつながる。だが、危機の時代には当局は情報の統制を強めるのが一般的であり、アメリカも検閲を行なった。その結果、日本軍の真珠湾奇襲攻撃の後、様々な流言がみられたのである。以上のように、彼の提案した対策のいずれもが実行するのは容易でないと考えられる。

その後アメリカでは、1960年代に各地で流言統制センターが設けられて人々に必要な情報を提供した。だが、流言をなくすことはできなかった。正確で最新の情報を得るためには、行政当局や警察と緊密に連絡をとる必要があ

53) カプフェレ『同書』

54) 池内一「太平洋戦争中の戦時流言」p. 31. なお、南博・佐藤健二編『近代庶民生活誌4 流言』三一書房1985も参照のこと。

55) Knapp. OP. cit. p. 35-36.

った。だが、そのことでかえって黒人達の信頼感を失ってしまったのである。

さらに、法律的な制裁を用いても流言を完全に統制することはできない。意図的なデマは減らすことができるかもしれないが、流言をなくすことはできない。また、流言の悪影響について教育することで流言に対する抵抗力を高めようとする試みもあるが、この方法でも流言をなくすことはできないのである。

なぜならば、流言は「公的に確認されていない情報」であり、それは、曖昧な状況におかれた人々の状況についての解釈として生じるものなのである。したがって、曖昧な状況がなくなれば流言はなくなる。だが、人々が関心を示すあらゆる主題について、公的に確認された情報を与えて曖昧さをなくすことなどとても不可能である。かりに可能だとしても、公式の情報しかなくなった時にもまた流言は発生するのである。流言というものは、公式の説明に対する不信から生まれるものなのである。実際、ソビエト社会においてうわさ話が人々の重要な情報源となっていることについては既に述べた。このように流言をなくすことはできないし、前述のように公式の情報源に対する信頼感を高めることも容易ではない。

流言は、これらの点からも人々が話すことを止めない限りなくならないであろう。流言が社会現象として生まれてくる元は、人間社会のどこにでも存在しており根絶できない。だが、流言という流行病のような現象が生じるためには、病原菌が感染し増殖することが必要である。そこで、流言への対処の仕方は有効な予防法と鎮静法の開発ということになるろう⁵⁶⁾。

カプフェレは、こう主張する。流言は必ずしも間違っていない。流言は非公式的で、公式の現実とは別な現実を様々に提示する。流言は、マス・メディアとは別な現実のメディアなのである⁵⁷⁾。それゆえ、流言はマス・メディ

56) 伊藤陽一、小川浩一、榊博文「デマの研究——愛知県豊川信用金庫“取り付け”騒ぎの現地調査Ⅱ」『総合ジャーナリズム研究』No. 70. 1974. p. 101.

57) カプフェレ『前掲書』p. 334-335.

アと共存する。そして、さらに彼はこう述べている。「ところで、われわれは何を確認したのか？ 全体的に根拠のない情報が、根拠のある情報と同じようにやすやすと社会に通用し、同じような、人々を動員する効果をひきおこすことができる、ということである。……うわさはわれわれに、われわれはそれが真実で、根拠があるか、証明されているかしているために、自らの知識を信ずるのではない、という自明の理を思い出させてくれる。実は逆なのだ。それらは、われわれがそれを信ずるが故に真なのである。」⁵⁸⁾以上のような流言と認識論との関連については、いずれ機会を改めて検討することにした。

58) カプフェレ『同書』p. 336.